

私たちは、 ストーマ周囲の ふくらみについて どの程度理解 しているのでしょうか？

コロプラストが「体形にフィットする」ストーマ装具を開発する際に、ストーマ周囲の体形的特徴(ボディプロファイル)が「平らである」および「へこんでいる」ストーマ保有者が主な対象者となっていました。そして、このタイプの大半のストーマ保有者に対しては、平面型装具および凸面型装具がそのニーズを満たしていました。

ストーマ周囲の体形的特徴(ボディプロファイル)が「ふくらんでいる」ストーマ保有者は、これまであまり注目されていませんでした。しかし、Ostomy Life Study 2016/17のデータでは、「ふくらんでいる」ストーマ保有者にも「へこんでいる」ストーマ保有者と同じ課題があると考えられることが示されています。

ストーマ周囲のふくらみに関する文献レビューを実施しました。ストーマ周囲が「ふくらんでいる」、あるいはストーマ周囲の「ふくらみ」の原因と管理について、科学的根拠があるかどうかを明らかにすることを目的に、世界



中のコロプラスト・オストミー・フォーラムのメンバー間で文献レビューを行い、検証しました。

ストーマ造設手術後の一般的な合併症は、ストーマ周囲のふくらみの形成²であり、これらのふくらみの多くはストーマ周囲のヘルニアであることが明らかにされています。文献^{2-8, 16}から、ストーマ周囲のヘルニアの発生率は、その術式およびストーマのタイプに応じて11%~60%であることが明らかにされています。

ストーマ周囲のヘルニアは、主に症状が無い場合は修復が行われません⁹。しかし、症例の10~30%では、ストーマ周囲の慢性疼痛、または腸の嵌頓および絞扼によって再手術が必要となっています⁵。ただし、腹筋の弱さが原因でふくらみが生じているストーマ保有者では、手術による修復が有益となる可能性は少ないです。

この問題はよく知られていますが、ストーマ周囲のふくらみに関する知識はどのくらい定着しているのでしょうか。ヘルニアをはじめとするストーマ周囲のふくらみに関して、根拠に基づく知識を得るとき、主な課題はその定義に一貫性がないことです。文献によっては、ストーマ周囲のヘルニアの発生率が、ヘルニアか単なるふくらみなのか分からない場合があります。

質問 No.1

ストーマ周囲のふくらみはすべてヘルニアでしょうか？

ふくらみは、臨床的な検査だけでストーマ周囲のヘルニアと区別することは困難です¹¹。さらに、ストーマ周囲のヘルニアについて統一された定義がないため、実際の発生率を同定することが難しくなっています¹²。例えば、筋膜は損傷されていないが、腸が皮下に脱出している状態（滑脱ヘルニア）や、過剰な皮下脂肪がふくらみを形成している場合もあります¹³。

質問 No.2

ストーマ周囲のふくらみが生じるリスクは年齢とともに増加しますか？

年齢とともに、腹筋は薄く、弱くなってストーマを十分に支えることができなくなる場合があります¹⁴。そのため、たとえばストーマ周囲のヘルニアなどのふくらみは、55歳を超えた高齢者に生じやすい^{2,4,7,26}ということを明らかにしたいいくつかのレトロスペクティブ研究の結果があります。

質問 No.3

運動や力仕事は、ストーマ周囲のふくらみやヘルニアが生じるリスクを増大させますか？

一般的には、重い荷物を持つ作業やストレッチはストーマの損傷や、ストーマ周囲の不快感を引き起こす可能性があるため、このような動作をしないように看護師がストーマ保有者に助言するように推奨しています¹⁵。しかし、これまでに運動や力仕事とストーマ周囲のヘルニアとの関連性を明らかにした研究はないため、特定の制限がヘルニア形成の予防につながるということを裏付ける根拠はありません。

質問 No.4

運動や固定用下着によってストーマ周囲のふくらみの形成を予防することはできますか？

3件の研究から、運動、固定用下着および力仕事に関する推奨事項の組み合わせによって、ストーマ周囲のヘルニアの発生率が低減する可能性があることが明らかにされています^{17~20}。しかし、運動または固定用下着のいずれか単独でストーマ周囲のヘルニアの発生率を低減することを示した研究はありませんでした。

質問 No.5

ストーマの位置がストーマ周囲のヘルニアのリスクに影響を及ぼしますか？

ストーマは腹直筋を貫く形で造設されます。腹直筋はストーマを支え¹²、ストーマ装具を皮膚に密着させる²¹には最も安定した位置です。そのため、腹直筋を貫いてストーマを造設するとヘルニア形成のリスクが低減するという考えはほぼ普遍的に受け入れられています。しかし、これを裏付ける明らかな証拠はありません^{3~4,7~8,18,22~25}。

質問 No.6

ストーマ周囲のふくらみ／ヘルニアがストーマを陥没させたり、ストーマの形や大きさに影響を与えたりすることはありますか？

ある文献レビューでは、ストーマ周囲のヘルニアが形成されると、ストーマが陥没することがあると指摘されています。しかし、その根拠は提示されていませんでした²⁶。ストーマの形や大きさについては、ストーマ周囲のふくらみ／ヘルニアによってストーマの直径（開口部の大きさ）が増大する原因となっている可能性があることを示した調査がありました²⁷。

質問 No.7

改良された新しい手術手技によってストーマ周囲のヘルニア形成を予防することができますか？

最新の手術手技やメッシュによる治療によって再発率を低減することができるとしても、再発率は依然として最大で22%に達しています²⁸。腹腔鏡下手術によって、ストーマ周囲のふくらみ、およびヘルニアの形成をはじめとするストーマ周囲の「ふくらんでいる」ポディプロファイルの発生率に変化が生じるかどうかは、引き続き文献で調査していく必要があります。

¹Ostomy Life Study 2015/16レビュー。²Ripocheら、2011年、J Visc Surg誌。³Leongら、1994年、BJS誌。⁴Londono-Schimmerら、1994年、Dis Colon Rectum誌。⁵Moreno-Mathiasら、2009年、Colorectal Dis誌。⁶van Dijkら、2015年、World J Surg誌。⁷Pilgrimら、2010年、Dis Colon Rectum誌。⁸Williamsら、1990年、Br J Surg誌。⁹Glasgow and Dharmain、2016年、Clin Colon Rectum誌。¹⁰Roussel、2012年、J Visc Surg誌。¹¹Gurmuら、2011年、Int J Colorectal Dis誌。¹²Israelsson、2005年、World J Surg誌。¹³Rubin、2004年「Intestinal Stomas: Principles, Techniques and Management」。¹⁴Williams、2003年、ia Journal誌。¹⁵Kaneら、2004年、Nurs Stand誌。¹⁶Pommergaardら、2014年、Hernia誌。¹⁷North、2014年、Br J Nurs誌。¹⁸ThompsonとTrainor、2005年、GIN誌。¹⁹ThompsonとTrainor、2007年、GIN誌。²⁰Varma、2009年、Br J Nurs誌。²¹Shellito、1998年、Dis Colon Rectum誌。²²Sjodahlら、1988年、Br J Surg誌。²³Eldrupら、1982年、Ugeskr Laeger誌。²⁴Hardtら、2013年、Cochrane Database Syst Rev誌。²⁵Hardtら、2015年、Colorectal Dis誌。²⁶Burch、2010年、Br J Nurs誌。²⁷Hongら、2012年、JKSS誌。²⁸Nagyら、2004年、Zentralbl Chir誌。